

会員報告

国際福祉機器展 2015

兵庫頸髄損傷者連絡会 島本 卓

アジア最大の総合福祉機器展「第 42 回国際福祉機器展 H.C.R. 2015」が、10 月 7 日（水）～9 日（金）の 3 日間、東京ビッグサイトにて開催されました。見学してきましたので報告いたします。



3 日間での来場者 119, 075 人

同展は、車椅子や介護ベッドはもちろん、食品、衣料、住宅改修機材からハンドメイドの自助具、最先端技術を活用した福祉車両までさまざまな福祉機器・用品が世界中から会場に集まった。今回も 14 カ国 1 地域から 522 社（国内 461 社、海外 61 社）が出展し、最新機器、製品展示だけではなく、日本と共通する課題をテーマとした国際シンポジウムや、福祉機器、保健福祉、介護、褥瘡などの各セミナー、出展者によるプレゼンテーションが行われた。

国際福祉機器展の歴史を知る

私が国際福祉機器展に見学に来るのが、2013 年と今年で 2 回目となる。

第 1 回（1974 年）は、全国社会福祉協議会と厚生省の共催で始まり、当時は「社会福祉施設の近代化機器展」の名称。福祉施設職員の腰痛が問題とされており、施設内の設備の近代化、業務の省力化により、就労環境の整備や施設入所者への安全な介護の提供を目的に開催。

第 2 回からは、「社会福祉機器展」と名称を変え、第 15 回から H.C.R. (Home Care & Rehabilitation Exhibition) になった。

宿泊のお供にコレ！

私は、7 日（初日）の一般社団法人日本リハビリテーション工学協会「褥瘡セミナー」に参加するために、6 日から東京入りし、2 泊 3 日で見学を行った。

外泊で困ると言ったら、移乗です。今回は、ホテルのスタッフさんにトランスファーを手伝ってもらわずに「トラベルトラック」を持参して、移乗することにしました。



トラベルトラック

褥瘡をつくらない！

頸損歴 9 年目になりましたが、思い返せば在宅生活を始めてから 1 年を立たぬ間に「褥瘡」をつくってしまいました。最初の頃は、人差し指で押さえたぐらいの大きさで薄いピンク色でした。まさに自己判断ミスと、自己管理ができておらず、どんどん状態は悪くなり手術をしました。その後、褥瘡予防を日々続けています。

「褥瘡セミナー」で、事例発表をされた K さん、F さんの話に参加者の関心を集めていた。その中でも私は、K さんの「ジーンズ」への工夫は興味深かったです。ジーンズを履くのですが、ポケット部分の生地を重ねることによる皮膚への圧迫。履いている間に痙性でジーンズにシワができたり、ズレたりすることに困っていました。ポケットを外したりしていたんですが、圧迫による負担は少ししか軽減できなかった。

K さんから、「女性用のジーンズ」を使ってい

るという話に驚きました。フィット感だけでなく生地の柔らかさなど考えても見なかったです。「褥瘡セミナー」で、予防と工夫を知ることができて良かったです。

次世代車椅子

実際に「WHILL」を見たのは初めてだ。「100m先のコンビニに行くのをあきらめた」の一言から開発が始まったそうです。デザインも車椅子のゴツゴツ感、デカイイメージを感じさせない。なんと前輪にはロボット工学の分野が取り入れられた「オムニホイール」で、24個のローラによって細やかな方向転換ができる。



WHILL

次世代車椅子をチンコンで操作できる日を楽しみにしている。オシャレに乗りたい!

癒やしのパートナー

介助犬ブースにいくと、「介助犬PR犬 エピちゃん」が車椅子の横にピタっと。



介助犬PR犬 エピちゃん

介助犬は、ユーザーの体の一部というべき重要な存在なんです。ドアの開閉やテレビのリモコンなどを手元に持ってきてくれたり、ペットボトルを開けたり、割箸を割ったりする手作業の介助も。

観光への一歩

「JINRIKI®」は、前輪を持ち上げて引くけん引式車椅子補助装置です。今まで難しかった悪路でも車椅子のスムーズな移動を実現します。緊急避難時はもちろん、アウトドア活動や外出時などの一時的な用途にも活躍します。「JINRIKI®」を見ていて、観光人力車が思い浮かんできました。障害者の観光めぐりを「JINRIKI®」で出来たらいいなと思います。

食事介助ロボット

「マイスプーン」という機器で、顎を使っての操作で自分で食事ができる機器です。私が病院で入院しているころに、実際に「マイスプーン」を使って食事をしていました。食事を自分のペースで食べることができて、食事の時間が楽しくなりました。自分でできるって、素晴らしいです。

終わりに

国際福祉機器展の見学を終えて感じたのが「日本の福祉機器ってここまですごいな！」と驚きました。福祉機器メーカーの技術力もさることながら、高齢者や障害者のニーズに応えようと取り組まれている。沢山の福祉機器が展示されていたのですが、個人的に残念な思いもある。「技術シーズ」としての役割は大きいですが、「ニーズ志向」ではないように感じる。福祉機器開発が競争となっているが、競争でなく「ALL JAPAN」でやっていかなくてはならない分野だと私は思います。一番大切にしてもらいたいのは障害当事者が「社会参加しやすい環境」だ。福祉機器は住環境と一緒にQOLの改善につながる。

障害当事者が使いやすいだけでなく「支援者」の負担を軽減させることも大きなポイントになる。福祉機器の基本的特質は「人としての尊厳と生活の質の向上を目的として個人が使用する」点にあると言えるだろう。しかし、「福祉」について、また新しい見解やアイデア、以前とは違う課題などが生まれてくるのかもしれない。